TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

2023/1/11

深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ

Masahisa Fukase 1961-1991　Retrospective

2023 年 3 月 3 日(金)―6 月 4 日(日) 東京都写真美術館 2F 展示室

《無題（窓から）》〈洋子〉より　1973 年　©深瀬昌久アーカイブス

このたび東京都写真美術館では「深瀬昌久 1961–1991 レトロスペクティブ」展を開催します。

深瀬昌久は自身の私生活を深く見つめる視点によって、1960 年代以降の日本の写真表現に独自のポジションを築きました。それは写真の原点を求めようとする行為でもあり、70 年代には「私写真」と呼ばれ、写真家たちの主要表現のひとつとして展開していきます。

深瀬は妻や家族など、身近な存在にカメラを向け、自身のプライベートを晒しながら、自己の内面に潜む狂気に意識を向けていきます。その狂気は、被写体に対する愛ある眼差しと、ユーモラスな軽やかさが混在し、深瀬作品を特別で唯一無二なものにしています。

本展では、〈遊戯〉〈洋子〉〈烏（鴉）〉〈家族〉など、主要作品を網羅した東京都写真美術館のコレクションに加え、《無題（窓から）》〈洋子〉のほか、日本大学芸術学部が 1980 年代初頭に収蔵した〈烏（鴉）〉個人所蔵の〈ブクブク〉〈サスケ〉ほか、充実した作品群によって構成します。1960 年代から 90 年代の初頭に活躍した深瀬昌久の軌跡を辿り、彼独自の世界に触れる機会とします。

本展のみどころ

1｜私写真の先駆者・深瀬昌久の日本国内初となる大回顧展

本展「深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ」は 1960－70 年代の日本写真界を切り拓いた、深瀬昌久(1934–2012)の、日本国内初となる大回顧展です。本展は、初期作品〈遊戯〉から後期の作品まで、深瀬が遺した足跡を時系列に沿って紹介するものです。
作家の全貌に迫る本展は、今後の日本写真研究の位置づけにおいて重要な転換点となることでしょう。

2｜《無題（窓から)》〈洋子〉15 点を初出品

東京都写真美術館では、写真史において重要な役割を果たした写真家の作品を体系的に収集しています。深瀬昌久もその一人として、当館の新規重点作家に指定しています。そして、当館が所蔵する多くの深瀬作品のシリーズのなかでも、深瀬の妻・洋子を被写体に撮影したシリーズ〈洋子〉は、写真家・深瀬昌久の足跡を辿るうえで欠かすことのできない重要な作品です。本展で初出品となる《無題（窓から)》〈洋子〉は、1973 年の夏、「だらだらとではなく覚悟して、たとえ面白くなくとも、一年間洋子を撮ってみよう」と、深瀬が決意を固めた後に撮影されました。様々なファッションに身を包み、表情豊かに写る洋子。ユーモラスな軽やかさと被写体への愛が感じられる一方、どこか過剰な演出が見る者に一抹の不穏さを感じさせます。

3｜写真家・深瀬昌久のカメラアイ

深瀬作品には、現在の私たちがスマートフォンを使って撮影する「セルフィ」に通ずるような身体感覚を見出すことができます。深瀬は、生涯を通してカメラを自己探求の手がかりとして用いました。〈私景〉、〈歩く眼〉、〈ブクブク〉など、深瀬がカメラと戯れながら、身体とイメージを一体化させた作品には、何気ない日常を題材にしながらも、時に狂気とユーモアが表裏一体となったかのような深瀬独自のセンスが見え隠れしています。写真表現の奥深い可能性を示す、深瀬の視座にご注目ください。

4｜“写真集の時代”を追体験できる専門図書室

現在、ヨーロッパ、アメリカの写真研究者を中心に 1960-70 年代の日本写真に注目が集まっています。なかでも、深瀬昌久への関心は高く、当館の写真・映像に関する専門図書室にも国内外から多くの研究者が訪れ、深瀬に関する資料を閲覧しています。図書室では、作家の初期写真集や、アマチュア時代の深瀬の活動を伝える雑誌を重点的に収蔵するほか、本展の関連図書を選書してご紹介します。展示室でオリジナルプリントを、そして、図書室では出版当時の作り手の想いが宿る写真集を同日に鑑賞できる、専門美術館ならではの鑑賞体験をご堪能ください。

深瀬昌久｜Masahisa Fukase

1934 年北海道生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。日本デザインセンターや河出書房新社などでの勤務を経て、1968 年に独立。1960 年代初期よりカメラ雑誌を中心に写真作品を多数発表。1974 年、米・ニューヨーク近代美術館で開催された企画展「New Japanese Photography」を皮切りに、世界各国の展覧会に多数出品。代表作に〈遊戯〉〈洋子〉〈烏/鴉〉〈家族〉〈サスケ〉などがある。1977 年第 2 回伊奈信男賞、1992 年第 8 回東川賞特別賞など受賞。2012 年没、享年 78。

展示構成［全 8 章］

第 1 章｜遊 戯　第 2 章｜洋 子　第 3 章｜烏(鴉)　第 4 章｜サスケ
第 5 章｜家 族　第 6 章｜歩く眼　第 7 章｜私 景　第 8 章｜ブクブク

第 1 章｜遊 戯

※本文は公式図録「解説」（文＝トモ・コスガ）を参考

1－01, 02《屠、芝浦》〈遊戯〉より　1963 年　東京都写真美術館蔵　©深瀬昌久アーカイブス

〈遊戯〉は、深瀬昌久が十数年かけて撮影した写真群をオムニバス形式でまとめたシリーズです。8 年間同棲した昔の恋人・川上幸代を振り返る「冥」、と場で解体される家畜と、新しい恋人の鰐部洋子を撮った「屠」、洋子との結婚生活をありのままに見せた「寿」、新宿でアンダーグラウンドシーンの人々との共同生活した日々を撮った「戯れ」、洋子とその母を写した「母」「譜」の 6 章で構成されています。1971 年、本作は『カメラ毎日』編集者の山岸章二の編集により、深瀬の初めての写真集として出版されました。

第 2 章｜洋 子

深瀬の代表作〈洋子〉は、深瀬の妻・洋子を被写体に十年余りの歳月をかけて撮影されたシリーズです。深瀬は結婚後も洋子を撮り続けました。1960 年代には二人が暮らした草加松原団地を舞台に、1970 年代には北海道や金沢、伊豆などの旅行先で、洋子を撮影しています。1973 年の秋には、勤め先の画廊に毎朝出勤する洋子の姿を四階の自室窓から望遠レンズで撮り続け、それらを「洋子」と題して誌上で発表

しました。1974 年、ニューヨーク近代美術館で開催された写真展「New Japanese Photography」にも〈洋子〉を出品しています。しかし、次第に二人の間には〈写真を撮るために一緒にいるようなパラドックス〉が生じ、1976 年に離別しました。

第 3 章｜烏(鴉)

3_01　《金沢》〈烏(鴉)〉より　1978 年　東京都写真美術館蔵／3_02　《襟裳岬》〈烏(鴉)〉より　1976 年　日本大学芸術学部蔵

ともに　©深瀬昌久アーカイブス

1976 年の春、洋子と離婚した深瀬は旅に出ます。幼年期の原風景が残る北海道に向かい、函館から故郷の美深町まで北上し、根室の納沙布岬、釧路、標茶、トドワラ、美幌、網走、襟裳岬などを訪れ、そこに数多く生息するカラスにレンズを向けました。東京に戻り山岸に写真を見せると、カラスがよく映っていたことから「烏」を題名にすることを薦められ、1976 年、15 年ぶりとなる写真展「烏／鴉」を開催します。この展示により翌 77 年も第 2 回伊奈信男賞を受賞し、深瀬の代表作の一つとなりました。
展示後、旅ではあくまで原風景の一部として捉えていたカラスそのものを今度は撮ろうと決め、北海道や洋子の故郷・金沢で撮影を続けます。その数年後には「ぼく自身が烏だと居直っていた」と心境にさらなる変化が訪れ、写真の視座にも〈カラスの視点から見た風景〉への変化が見られるようになりました。

第 4 章｜サスケ

4《無題》〈サスケ〉より　1997-1998 年，個人蔵

©深瀬昌久アーカイブス

深瀬はその生涯で多くの猫と暮らし、写真に写しています。なかでも印象的なのがサスケとモモエでした。洋子との離別から半年ほどが経った 1977 年の初夏、深瀬は友人の写真家・高梨豊の紹介で子猫を譲り受けます。ピョンピョンと元気に跳ねる姿から忍者の猿飛佐助を連想した深瀬は、サスケと名づけました。ところが、譲り受けて間もなく、サスケは行方をくらましてしまいます。サスケと再会できなかった深瀬は、よく似た別の子猫を引き取り、二代目サスケと名づけ、どこへ行くにも連れ回しました。
１年後、成猫となったサスケの動きが緩慢になったため、新しい子猫を引き取りモモエと名づけて飼い始めました。深瀬は二匹との撮影の日々を振り返って、「私はみめうるわしい可愛い猫でなく、猫の瞳に私を映しながら、その愛しさを撮りたかった」と書き残しています。

第 5 章｜家 族

5_01《昌久と父・助造》〈家族〉より　1972 年
5_02《上段左から妻・洋子、弟・了暉、父・助造、妹の夫・大光寺久、下段左から弟の妻・明子と妹の長男・学、母・みつゑと弟の長女・京子、妹・可南子、弟の長男・卓也》〈家族〉より　1971 年
ともに
東京都写真美術館蔵、©深瀬昌久アーカイブス

1971 年の夏、三十代も半ばに入り郷里を懐かしんだ深瀬は、洋子を伴って故郷の北海道中川郡美深町を訪れ、父・助造が経営していた深瀬写真館の写場（スタジオ）に置かれた古い八切写真機のタチハラ・アンソニー A 型を使って、洋子を含めた一家の記念写真を撮影します。後に〈家族〉と呼ばれるシリーズの始まりでした。以降、頻繁に帰省しては、同様の記念撮影を行い、1974 年には自身と両親、洋子の遺影をそれぞれ写しました。一連の撮影は 1975 年に中断されましたが、1985 年、衰えた父・助造の姿を見て「ピントグラスに映った逆さまの一族のだれもが死ぬ。その姿を映し止める写真機は死の記録装置だ」との理由から深瀬は撮影を再開します。1987 年 1 月に助造が他界すると、葬儀の日に喪服姿の家族を写場に集め、かつて助造が立った位置にはその遺影を置き撮影しました。1989 年、深瀬写真館は廃業し家族は四散。20 年弱続いた本作も幕を閉じました。

第 6 章｜歩く眼

6〈歩く眼〉より　1983 年　東京都写真美術館

©深瀬昌久アーカイブス

本作は、東京での記憶を手がかりに、壮年期を迎えた深瀬が、その残像を探る試みだったといえるでしょう。1982 年、深瀬は上京後 30 年間で移り住んだ 14 か所を順々に再訪します。かつて洋子と暮らした松原団地を訪れた際には、一種の怖いもの見たさ、あるいは犯罪者が現場に戻る心境を連想しながら、「撮る欲望がとめどなく肥大して、累々たるイマージュの墓石がひろがる」と書き綴っています。右手にカメラを携えて歩き続けるうち、目の触手が何かに絡んだ瞬間シャッターが押されているほどにカメラアイと化した深瀬は、あてもなく歩いて撮影した場所を東京都の地図に赤く塗り潰しました。「同じような川筋が街並が雑踏が、のっぺらぼうに眼を通過していく」ことから、本作を「歩く眼」と題しました。

第 7 章｜私 景

7《ロンドン》〈私景〉より　1989 年　東京都写真美術館蔵

©深瀬昌久アーカイブス

深瀬は、関心ある被写体を写真に撮ることで、撮影対象をことごとく失ってきたといえるでしょう。そんな深瀬にとって、晩年に残された被写体は他でもない彼自身でした。1989 年、旅先のヨーロッパやインドで自身の身体の一部をフレーム・インさせて風景を撮り始めます。写真に写される物事は自分自身の反映と言えることから「私景」と題しました。後に舞台を東京に移したあとも同様の手法を用いて、1990

年 12 月から丸 1 年をかけて撮影します。1992 年 2 月、銀座ニコンサロンで発表された〈私景 ’92〉は会場が 444 枚もの写真プリントで埋め尽くされ、その大半に深瀬自身が写り込むという異様な内容でした。同年 6 月、深瀬は行きつけのバーの階段から転落し、重度の後遺症を負います。以降は特別養護老人ホームで介護を受けながら過ごし、二度とカメラのシャッターを切ることはありませんでした。

第 8 章｜ブクブク

1991 年の暮れ、深瀬は自宅の湯船の中に潜った自分の姿を約 1 か月間写し続けました。水中の下からあおりながら撮ると、光源の入射角が大きくなることで水面に光の全反射が発生します。この時、水面に水鏡が生まれて水中の像が反射し、深瀬の顔が上下にふたつ繋がったイメージが生まれます。深瀬はフィルムを現像するまで想像のつかないランダムな写真の仕上がりが気に入ったようでした。撮影の最終日に綴られた手記には、「9 時 45 分 今夜でブクブクは完全に終らせる」「ブクブクはもう充分うつしたし、これは世界的傑作として残ることはまちがいない」「この次の憑物は何だろう？」「ぼくの一生というのは写真に憑かれていたらしい」と記されています。
1992 年、本作は〈私景 ’92〉の一部として展示発表されました。

8《91.11.10 November 10th 1991》〈ブクブク〉より　1991 年　東京都写真美術館蔵

©深瀬昌久アーカイブス

出品作品点数　計 117 点（そのほか、雑誌等資料）予定

公式図録

『深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ』発行 赤々舎

価格未定、全出品作品図版、作品リスト、担当学芸員ほかエッセイを収録予定。

関連イベント

会期中に「ゲストによる関連トーク」、「担当学芸員によるギャラリートーク」、「手話通訳付き展覧会トーク」等の関連イベントを開催予定です。詳細決定次第、ウェブサイト等でお知らせします。

開催概要

展覧会名[和]　深瀬昌久　1961-1991　レトロスペクティブ
展覧会名[英]　Masahisa Fukase 1961-1991 Retrospective
主　催　　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
協　賛　　東京都写真美術館支援会員
協　力　　深瀬昌久アーカイブス
会　期　　2023 年 3 月 3 日(金)－ 6 月 4 日(日)
会　場　　東京都写真美術館 2 階展示室
　　〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
開館時間　10:00－18:00 (木・金曜日は 20:00 まで、入館は閉館の 30 分前まで)
休 館 日　　毎週月曜日（ただし、5 月 1 日は開館）
入 館 料　一般 700 円／学生 560 円／中高生・65 歳以上 350 円　日時指定予約推奨
　　＊小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者 (2 名まで)、年間パスポートご提示者は無料。
電　話　　03-3280-0099
　　www.topmuseum.jp
　　［Twitter］@topmuseum ／［Instagram］topmuseum

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。
＊図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよび和英いずれかクレジットの表記をお願いします。
　［和文］© 深瀬昌久アーカイブス
　［英文］© Masahisa Fukase Archives
＊図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 /www.topmuseum.jp

展覧会担当　鈴木佳子 / 浜崎加織
広報担当　平澤 / 池田 / 鈴木(彩) press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。